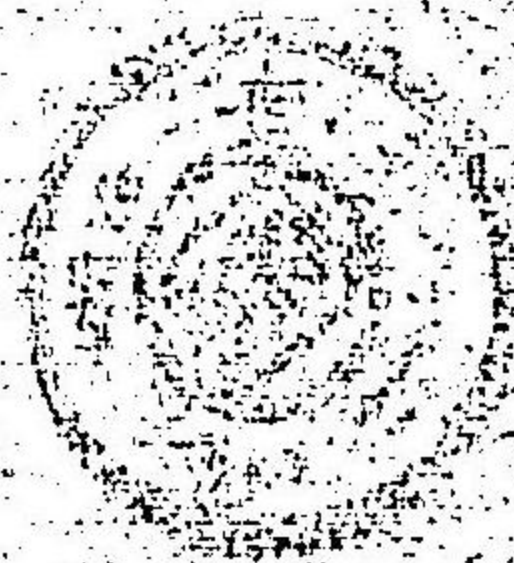


72-8

文學の調和



Die Natur.

Natur! wir sind von ihr umgeben und umschlungen unvermögend aus ihr heraus zutreten, und unvermögend tiefer in Sie hinein zu kommen. Ungebeten und ungewarnt nimmt sie aus in den Kreislauf ihres Tanzes auf und treibt sich mit uns fort, bis wir ermüdet sind ihrem Arme entfallen. Sie schafft ewig neue gestalten; was da ist, war noch nie; was war, kommt nicht wieder: Allen ist neue und doch immer das Alte.

Sie scheint alles auf Individualität angelegt zu haben, und macht sich Nichts aus den Individuen. Sie baut immer und zerstört immer, und ihre Werkstätte ist unzugänglich.

Sie lebt in lauter Kinderen; und die Mutter, wo ist sie? Sie ist die einzige Künstlerin: Aus dem simpelsten Stoffe zu dem Größtem Vollendung, zur genauesten Bestimmtheit immer mit

jugendl.

etwas Weichem Überzogen. Jedes ihers Werke hat ein eigens Wesen, Jede ihrer Erscheinegen isolirtesten Begriff, und doch macht alles eins.

Es ist ein ewiges Leben, Werden und Lewegen in ihr, und doch rückt sie nicht Weiter. Sie verwandert sich ewig, und ist kein Moment. Stillstehen in ihr. Fürs breiben hat sie kleinen Begriff, und ihren Fluch hat sie aus Stillstehen gehängt. Sie ist fest: ihr Tritt ist gemessen, ihre ausnahmen selten, ihre geße unwanderbar.

Sie läßt jedes Kind an ihr kunsteln jeden Thoren Über sie richten, thousande stumpf Über sie hingehen und nichts sehen, und hat au allen ihre Freude und findet bei allen ihre Rechnung.

Man gehorcht ihren geseßen, auch Wenn man ihnen Widerstrebt; man wirkt mit ihr auch wen man gegen sie wirken will. Sie mach, alles, was sie giebt, zur wahrtocht; denn sie macht es erst ununtbehrlich. Sie säumt, daß man sie werlange; sie eilt, daß man sie nicht satt werde.

Sie hat keine Sprache noch Rede, aber Sie schafft zungen und Herzen, durch die sie fühlt und spricht. Ihre Kroen ist die Liebe; nur durch sie kommt man ihr nahe. Sie macht Klüfte zwischen allen Wesen, und alles will sie werschlingen. Sie hat alles isolirt, um alles zusammen zu ziehen, durch ein paarzüge aus dem Recher der Lebe hält sie für ein leben voll Mühe schadlos.

Sie ist alles, sie belohnt sich selbst und bestraft sich selbst, erfreut und gält sich selbst. Sie ist rauch und gelinde, liebich und schrätlich, kraftlas und allgewartig. Alles ist immer da in ihr. Vergangenheit und zukünft kennt sie nicht. Gegenwart ist ihr ewigkeit. Sie ist güttig, ich Preise sie mit allen ihren Werken. Sie ist weise und still. Mann reißt ihr keine Erträlung von Leibe, trüßt ihr geschenk ab, das sie nicht freiwillig giebt, sie ist listig, aber zu guten ziele, und an besten ist es, ihre List nicht zu merken.

Sie ist ganz, und doch immer unvollendet.

4

So wie sie es treibt, kann sie es immer treiben.
Jedem erscheint sie in einen eigenen gestalt.
Sie Verbirgt sich in Taufend Namen und
Termen, und ist immer dieselbe.

Sie hat mich hereingestellt, sie wird mich auf
heraus hühren. Ich Vertraun mich ihr. Sie
mag mit mir schalten; Sie wird ihr werf nicht
hassen. Ich Sprach nicht von ihr; Mein was
wahr ist und was falsch ist, alles hat sie ge-
sprochen. Alles ist ihre Schuld, alles ist ihr
verdinst.

Goethe. (1780)

目次

文學の藪淵

天地	一
美	六
文學の苑内に備へられたる樂園	二六
人生の狀態	三一
文學の目的	
文學の定義	四九
詩文	五六
散文	五八

俳諧	六二
小説	六五
文學の發達	
日本文學	七六
支那文學	九四
歐洲文學	一〇七
文學の調停	
美	一三八
音樂	一四一
義人の血涙	一四三
宗教	一四六

一昔時英國に於て英文法の不完なるときに
 或る文學博士大に改革の任に當れり彼れ
 其改良策を講ずるや大に氣焔ある文章を
 艸せり彼れの技用せし文章の文法も亦彼
 れの思想の改良を要すべきものなりし余
 の此書を著はす是に類する處多し讀者幸
 に余の思想のある處を見よ謹んで大家の
 批評を待つ

この書は
 批評を待つ

識者
表

二

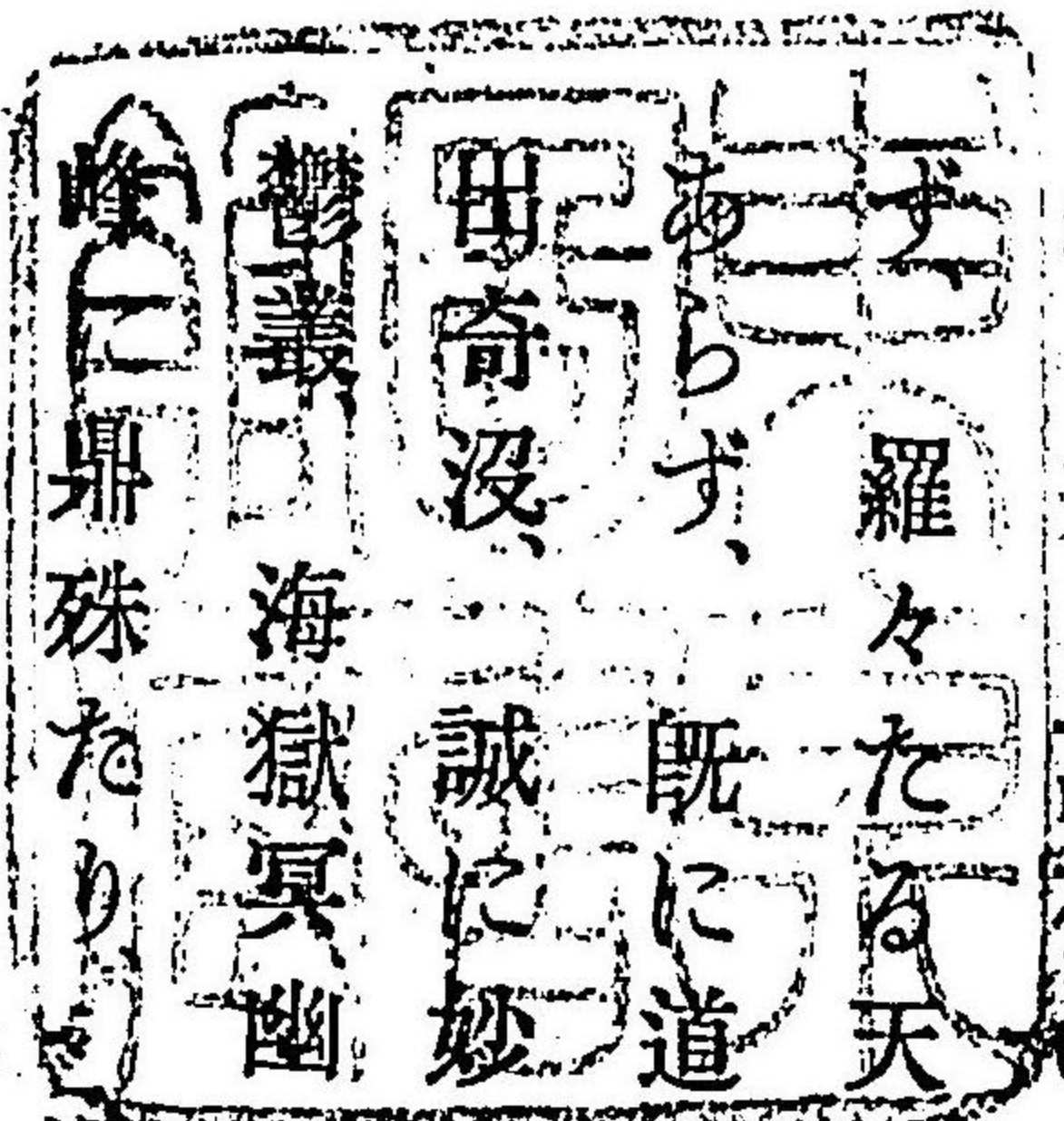
一 天地の自然を文學の軌軸として書きたる
は今日の文字界に超自然力を不用とする
干燥文學多ければなり

一 余の思想は先輩の文學者に養はれたる思
想を天地に接らしめて吐きしものなれば
先輩者に禮し天地に謝す

大月隆識す

文學の藪淵

天地



森々たる萬有の形象、其道理なくんばあら
 ず、羅々たる天地の配列、其調理なくんば
 あらず、既に道理あり、既に攝理あり、神
 田奇没、誠に妙縁、花笑ひ、鳥答へ、藪森
 鬱叢、海獄冥幽にして朱産を吐き、群嶽雲
 峰、鼎殊たり、温氣種芽を滋育して涼風炎
 熱を相調す、其出づる因なきにあらず、其



持する和なきにあらず、因あり果あり、寄
 出妙調、仰げば星辰となり、伏せは地獄と
 なる、地厚ふして萬物を載し、天之以應し
 て四時調停、晝夜序を誤らず、光暗表裏、
 走獸野に群りて群翼天空に翔ふ、呼吸に空
 氣ありて動植を調和し、水ありて呑むべく、
 翅鱗ありて泳ぐべし、聽くに耳あり、知る
 に知覺あり、視るに眼睛ありて、思ふに心

あり、嗅くに息氣あれば鼻ありて之に應ず、
 翼あれば空あり、水あれば海ある、魚心あ
 れば水心あり、風物に抗すれば物激して鳴
 る、能く動けば静となり、深沈遂に動搖を
 生む、生るれば死あり、死すれば生あり、
 蒸氣天空に昇り熱を失へば降る、春夏秋冬、
 寒暑涼冷、火あれば水あり、有あれば爰に
 無あり、有無黑白相櫟櫃す、則あれば物あ

り、物あれば則顯れて之を官す、形なきものを道理と云ひ、形に携ふて配するを人と云ふ、喜怒哀樂憂惡慾、泳ぐに鳍翅なく、飛ぶに翼なし、其軀量は馬に及かず、其勇氣は猛獸に劣る、劣るを以て勝るに對すれば鳥獸に及かず、勝りたる思慮は眞に是れ萬物の靈、冥幽に足を臺して理想は萬有に透曉す、情意發して幽谷に鰐魚を泣かしめ、

フツツナリ付て安

知識は飛んで霹靂を叱咤す、腦に天地の法則を携ひ道理を寫して態妙幽玄、吾ありて天地を知り、天地目的して余を生む、天地余なるか、余れ天地を知りたるか、兎に角理想は神人融合、樂みあれば苦みあり、苦みあれば樂み來る、今日の榮華明日の墳土、前半世の安樂は後半世の辛苦、惡邪全盛を得て聖善溝谿に呻吟す、鳳凰籠にありて雲

雀高翔、豪賊白中に横行して吞むべき者を
 尋ぬ、演劇あり、役者あり、教會あり、僧
 侶あり、法律あり、官衙あり、學校あり、
 學者あり、文人あり、雅客あり、罪人あり、
 善人あり、小説あり、巡査あり、農あり、
 士あり、工あり、商あり、貴賤貧富ある、
 是誠に宇宙の大觀なり。

美

天地美情を滴して吾人の情緒を濕す、人靈
 は天情に接して理情愈々濃厚なり、情致揚
 々餘情を生じ、快透於皇身を置くの處を知
 らざるに至る、噫嘻透逸なる哉天地、於戲
 美逸なる哉情靈、山嶽氣骨を吐けば之を含
 んで勇氣となり、海洋潮嘯を吹けば之に望
 んで濶大となる、深谷を跡んで幽逸となり、
 蒼天望遠期せずして遠大となる、花に對し

笑わさることを得ず、鶯を聴き喜はさるを得ず、峨眉山月半輪の秋、獨り孤燈に坐して情交爰に愈々切なり、天音の妙調情底を挑抉して仙境に遊はしむ、或は哀むべく、笑ふべく、喜ぶべく、蹈るべく、餘音嫋々情呼を絶極するに至る、螢あり、涼風あり、雷雨あり、電光あり、虹霓あり、千狀萬態吾人が知情を自然に接合せしめさることな

し、聖靈雨そよぎ、浩然の氣集り、慨世の偉大なる人塊を築き、審美、純善、純正、純潔、純眞なる天真の道理を人間を通して爆發するに至る、人之所以りて進み、之によりて退き、之が爲に書し、之が爲に詠じ、之によりて照り、之によりて躡かざるに至る、人生最終の目的に架するきざはしも又他に覓むるを得べからざるなり。

美とは何ぞや、美とは萬象の浩氣襲ひ來りて吾人の情性を動かし妙機名つくへからざる快愉の感情にして只情に於て之れを掬するを得るのみ、天地審美を吐き、人之に應ずるの美性を供ふ、天地情交融縁の機動文學的交合の快味を云ふ。動物に發し、植物に流し、山海空立至る處に發揚す、見る者として美ならざるなく、聞く者として美な

十

らざるなく、接する者として美を極めざるなし。世に醜惡と唱ふべきものは此情緒の接合配置を誤りたるものにして、客觀的に存在するものにあらず、薔薇棘げを持つと雖も芳香の花輪を護せんが爲なり、之を名けて醜と云はゞ花を手折らんとするもの、私言のみ、泣くべきに泣き、恐るべきに恐れ、怒るべきに怒り、撲つべきに撲ち、破るへ

十一

きに破らば、泣くことも、恐るゝことも、怒ることも、撲つことも、破ることも皆美なり、誠に美なる哉、美なる哉、美は美にして美なり、故に美は美なり、人のか爲に生れ、之か爲に死し、之か爲に夫妻として偕老の契を終る者幾人なるを知らざるなり、クリストの如きは此美を妻となしたる者なり、シヨンソン婦人の如きは此美を夫とな

したる者なり。ゲーテ曰く、余れ世の所謂美人に交はらんよりは天眞の道理を抱くことは余の樂み實に深しと。

ゲーテの前半世は全く美を以て妻とせり、彼れ始めてイタリに登り友人に遇ふ、友人問て曰く汝妻ありや、彼れ答て曰く、余か妻は至る處にありと、其後或豪家の招きに應せり、此家には妙艶なる令嬢ありて常に文學に志望厚く、別室に坐して文書を樂しみとせり、常にゲーテの名望を聴く、ゲーテも又此婦人の文

學者たることを知る、ゲーテ！此處に宿し半夜臥を起きて家外に出づ、一條の光線別荘の内より輝く、ゲーテ！怪んで之を伺へば妙齡なる一婦人の文學に酔して終寢を忘れたるなり、ゲーテ！聲を潜めて之を呼へば婦人靜かに戸を開き、四方山の雑話の末、婦人ゲーテ！の良友ありや否やを以てす、ゲーテ！曰く余が愛友は天眞の美にして文學の母なり、余れ是れと共に進退苦樂を供にすど、婦人胸を撲て驚て曰く貴殿は余が終身宿約の良夫を奪へりと、ゲーテ！心中大に喜んで曰く、余れ今日迄天下に妻とすべき者を知らざりしが、

此婦人こそは肉の肉なる余が思望を得たるものなりと、遂に約成り夫婦となれり。

美に對する大家の各説を登載す

ソクラテスの意見

氏は美を以て善と同一となし、善と美と皆利用相循のものに歸せり、されども氏は美の美たる所以は其是より直接に生ずる愉快の感にあらすして生活究意の目的を達するに必須なる所以に存すとせり、氏は又絶對の美あることを認めず、美を以て相對的のものとせり。

プラトーン

氏は絶対的美を主張し、真と善とを合せて所謂理想眞
 躰即ち至善の三面とせり、天下眞美なし、只絶対的の
 美あるのみ、絶対的の美は他物に依りて美なるにあら
 ず、即ち自依の美なり、而して凡百美物の根底となる
 ものなり、美は物にあらず物の俟て美をなすものなり、
 美は浮沈常なき現象世界を絶して永劫不變完全無欠の
 眞躰たるものなり、かくの如く氏は美を以て高尚至貴
 とす。

アリストートル

氏は絶対的の美あるとを許さず、即ち美を以て相對的

の現象世界に存するものとせり、又善と美とを分ち動
 作を離れて存するとなしと雖も美は不動の物に於ても
 之を認むることを得べしとせり、即ち高尚純粹なる一
 種の快感を生ずるものを云ふなり、其形躰たる秩序均
 齊にして、且つ鮮明の輪畫を有し、一括の下に其全部
 を感ずるを得べき物なるを要す、去れども又感覺に觸
 るゝを得べきものならざるべからざるか故に、其形小
 に過くべからず、詩人の摸倣すべきものを三種に分つ、
 一は過去若くは現存の事實なり、二は人々の認めて蓋
 し然らんと認定する事實なり、三は必須に然らざるべ

からざる所以の事實なり、而して此三種に屬するものは美術に存する理想的性質にして美術の單に寫眞を主とせざる所以、人工の自然に超ゆる所以とせり、氏又曰く詩歌殊に悲哀の曲は聽者の内心に恐怖と憐愛の情を惹き起し是れに依りて其心中に存する一切の煩惱を淨去せしむる者なりと。

オーガスチーン

アリストートルを去ると六百餘年にしてオーガスチーンを得たり氏はプラトンの理想を以て基督教々理の説明に適用せり即ち分殊中に存する理一を以て美の躰と

なし神を以て萬有の統一者となし至善至美至眞の性を具有する者となし天下の事物皆性を神に稟けて生ずるものとせり。

パウムガルテン

氏は獨乙美學の調和者又純正哲學者にして美の眞想を歐洲に紹介せし大家なり、彼は美及美術の理を系統的に論じて審美學の一科を創立せり、氏は知識に論理的知識と審美學知識とを分ち、論理的知識は悟性の認知する所にして明晰なる觀念の形をなして意識に現はるゝ者、審美的知識は感情の知識にして其形たるや明晰

ならず、且つ混雜の狀を呈するものなりとし、感情の知識の完全なるものを美と云ひ、之に反するものを醜と云へり、又氏は自然を以て最美の觀となし、美術の目的は模倣にありとせり。

カント

氏は美を以て知識と相悖らざる所の無欲普遍必須なる満足をも吾人に感せしむるものとし、之を判定するの能力を趣味と名けたり、趣味は智力に屬せずして感情に屬す、換言すれば論理的ならずして審美的なり、美物に依りて惹起されたる審美の感は其性質全く無欲のも

の即ち自利に關せざるものにして愉快の感と自から異なる所あり、愉快の感には存在の知覺の必ず之と伴ふものなれども美感には物の存不存の知覺更に關するとなし、是其全く欲を離れて高尚潔白なる所以なり、愉快の感は動物と雖ども之れを感ずるを得べし、美感は只人類に限るものとす、美より生ずる満足は普遍の者にして一己人の私すべきものにあらず、但し美感の生ずるには人々肉躰あるを必要とすれども道德の感に至りては人々肉躰あるを必要とせず、即ち肉躰を離れて善を感ずることを得、愉快の感より生ずる満足は

好なり、審美の感より生ずる満足は樂なり、道德の感より生ずる満足は安心なり、カント又曰く美は夫自身に於て最終なるものにして決して他の目的に對する手段となるものにあらず、且つ善の表徴となりて萬人の之を見之を聽て樂むを求む、此故に美を判定するの能力即ち趣味は畢竟善惡を判定するの能力、即ち良心の知覺にあらはるゝものと見て可なり。

美術は自由の製作物にして人類に存する自由意志の發表せるものなり、此故に人工物に常に存する所の掣肘究屈を見るとなく恰も造化自然の作の如くに見へざる

へからず、美術家が特有する靈妙の天才は自然(神)に代りて美術に法則を與ふるものなり。

シェリング

氏は其超絶哲學に論據を立て、美を以て主觀客觀の調和合躰にありとし、美術に接して美感を感じるは我なるものか主觀と客觀とを同一合躰即ち絶對として觀するに依るとせり、美術家獨得の伎倆は主觀と客觀とを調和一致せしめ絶對の眞を實現せしむるものにして美術に對するとき無限の満足を感じるは我自ら我を完全に觀するに依るなり、美術の美は自然の美に優るもの

にして美術は哲學の上にあるものなり、美は世界全體の調和にして、同時に世界の理想的模形なり、氏又悲劇の眞を以て主觀に存する自由の理と客觀に存する必然の理との勝敗不決なる争闘に歸せり。

ヘーゲル

氏は美を以て知覺の媒に依りて宇宙精靈の表現するものとし、其知覺的表現は美の眞善と異なる所以とせり、美は分殊に存する理一なり、美は自然に於て見るべしと雖も殆に美術に於て表はる、美術の美の自然に於ては後者に於てよりも精靈の發表するとの顯著なるに依

る 美術は形と躰との調和せるものなり、形は即ち精靈、躰は即ち物質、精靈の物質を規するに依りて美を生ず、東方の美術は(埃及、波斯、印度)躰多きに過く、羅馬の美術は形多きに過く、形躰の調和最も其宜しきを得たるは希臘の美術なり、建築は美術の最下位にあるものにして躰形に勝る、其作り出す處のものは無生躰なり、彫刻は建築の上にありて形の稍増すを見る、是其目的とする處主ら生躰にあればなり、繪畫は又其上にあり殊に三面延長を二面となし、觀者をして第三面即ち厚さをば之を想像せしむるの一事は繪畫の斷然建築

及彫刻の上にありて更に精神的なる所以なり、音楽に至りては全く精神的にして空間的の延長なく只時間的の経過あるのみ、詩歌は前四者を惣合して直接に精神を感動するものにして美術中最高尙のものなり。

文學の苑内に備へられ たる樂園

美しきかな山水のかため、泉涓々として流る、嫩芽花に對して笑み、鳥は樹梢に跳りて又枝に移る、池水銀鏡、白鳥鶴々たり、

微風馨を送りて桃花馥郁、草色青々として雅致自ら滴る、庭前に虎石ありて老松の間に眠る、家睦樂團一室のうち坐ながら風致を生む、天女別室に妙音を送りて鰐魚之が爲に泣く、友あり遠方より來りて余を慰め、犬猫伍を共にして主人になつく、妻子愛情に濃厚にして快情風姿に滴る、婢僕聲に應じて動き、四濱波靜にして門戸又閉すの要

なし、四隣相和し、妻子情話のうち眠る。

あゝなんぢ美しきかな吾佳耦よ、あゝなんぢうるはしきかななんぢの目は面怕のうしろにありて鶴の如し、汝の髪はキレアテ山の腰に伏したる山羊の群に似たり、なんぢの齒は毛を剪りたる牝羊の浴場より出たるか如し、各双子を生みて一も子なきものはなし、汝の唇は紅色の線維のごとくその口は美し、汝の頬は面怕のうしろにありて柘榴の半片に似たり、なんしの頸頂は武器庫にとて建てたるダピテの成樓の如し、その上には一千の盾を懸けつらぬ、みな勇士の大楯なり、なんし

の兩乳房は牝獐の雙子なる二箇の小鹿が百合花の中に草はみ居るに似たり、日の涼しくなるまで、影のきゆる迄、われ没薬の山また乳香の岡に行くべし、わが佳耦よ、なんじは盡くうるはしくして少のきずもなし、新婦よレバノンより余にともなへ、レバノンより余と共に來れ、せるものんの嶺より望み、獅子の穴、又豹の山より望め、わが妹、わが新婦よ、なんしの愛は樂しきかな、汝の愛は酒よりも遙かにすぐれ、汝の香油の馨は一切の香物よりもすぐれたり、新郎よ、汝の唇は蜜を滴たらず、汝の舌の底には蜜と乳とあり、なん

しの衣裝の香氣は、レバノンの香氣の如し、余が妹、余が新婦よ、なんしは閉たる園、閉たる水源、封したる泉の如し、汝の園の中に生ひ出つるものは石榴及びもろくの佳果、又ユベル及びナルタの草、ナルタ番紅花、菖蒲、桂枝さまざまの乳香の木、没薬、蘆薈、一切の貴き香物なり、なんしの園の泉水、活ける水の井、レハノンより出つる流なり、北風よ起れ、南風よ來れ、わが園を吹きて其香氣を揚げよ、ねかわくは余か愛するものゝ園に來りて、その佳き果を食はんことを。

人生の状態

智者は智にして益々道理を覓む、茲に益々賢なり、愚者は愚にして道を輕んず、故に益々愚なり、賢愚の差神獸も畜ならざるに至る、茲に於てか遂に道理の衝突起る、富者は財餘りて茲に勢利を壟斷す、故に益々富み、貧者は目前の活路に苦んで事業に難し、故に益々貧、貧富の差人獸も畜ならざ

るに至る、遂に反目凌駕社會黨の氣焰を裏面に築つく、貴き者は地位に居りて愈々貴顯、賤しき者は墮落して愈々賤、人情の勢態下を虐し上を侮るに至る、神獸人犬一堂に反目吞噬し、不調和の極死生を目前の苦痛に供するに至る、天地動々是れか爲に泣き、神聖之か爲に恐る、或は預言者を通して滅亡の預言となり、或は義人を感じしめ

て國難の犠牲となり、或は文章となり、詩歌となり、演説となり、演劇となる、或は苦み、或は泣き、慷慨悲憤、活文學の叢園となる。

余か氣息は已にくさり余か日すでに盡なんとし墳墓余れをまつまことに嘲弄者等余が傍にあり我目は彼等の辨争を常に見ざるを得ず願くは質を賜ふて汝自ら余の保證となり給へ誰か他に我が手をうつものあらんや汝彼等の心を閉ぢて悟るところ無からしめ給へ必ず彼等

をして愈らしめ給はじ彼われを世の民の笑柄とならしめ給ふ我は面に唾せらるゝものとなれりかつ又我目は憂によりて昏み肢體は凡て影の如し義しきものは之に驚き無辜者は邪曲なるものを見て憤る然りながら其道を賢く持ち手の潔きものはますく力を得るなり請ふ汝等皆ふたゝび來れ我は汝らのうちに一人も賢きものを見ざるなり我が日は已に過ぎわが計る處余が心に冀ふ處は已に敗れたり彼ら夜を晝に變ふ暗の前に光明近づく我若し待つところあらば是れ我が家たるべき陰府あるのみ余は黒暗に余が床を展ぶわれ朽腐にむかひて

は汝は余が父なりと云ひ蛆にむかひては汝は余が母余が姉妹なりと云ふ然は余が望は何處にあるか余が望は誰か之を見るものあらんや是は下りて陰府の關に至らん之と齊しく我身は塵の中に臥靜まるべし今は余よりも年少きものども余を笑ふ彼等の父は我が賤めて群の犬と並べ置くことをもせざりしものなりまた彼等の手の力も余に何の用をか爲さん彼等は氣力已に衰へたるものなりかれ等は缺乏と饑によりて瘦をどろえ荒かつ暗き野にて乾ける地を咬むすなはち灌木の中にて藜を摘み蒔の根を食物となすかれらは人の中より逐ひ出

され盜賊を逐ふが如くに人かれを逐ふて呼ばる彼等は恐ろしき谷にすみ土穴及び磐穴にすみ灌木のうちを断き荆棘の下に偃す彼等は愚なるものゝ子卑むべきものゝ子にして國より撃ち出さるしかるに今は彼らの歌謠になり彼らの嘲諷となれり彼ら余を厭ふて遠く余を離れ又余が面に唾することを辭まず神余が綱をときて余をなやまし余をなやましたまへば彼等も余が則に其轡を縦せりこの輩余か右に立ち上り余が脚を除け余にむかひて滅亡の路を築つく彼らは自ら便りなきものなれども尙ほ余が道をこぼち余が滅亡を促がすかれらは石

垣の大なる崩口より入か如に進み來り破壊の中にて余から之に乗かゝり懼しきこと余身にのそみ風の如くに余か尊榮を吹きはろふ余が幸福は雲の如くに消失す今は余が心余れのうちに裏に鎔けて流れ患難の日堅く余を執ふ夜にいれば余が骨刺れて身を離る余か身を噬む者遂に休むことなし余か病疾の大なる能によりて余か衣服は醜き様に變り裏衣の襟の如くに余が身に堅く附く神われを泥のうち投こみたまひて我は塵灰に等しくなれり余れ汝に向ひて呼けるに汝答へたまはず汝は余にむかひて無情なり御手の能力を以て余を攻撃すな

んじ我を擧げ風の上に乗せて負去らしめ大風の音ととも
に消亡しめたまふわれ知る汝は余を死に歸らしめ一
切の生物の終に集る家に歸らしめ給はんかれは必ず荒
埜にむかひて手を舒べたまはずたとひ人滅亡に陥ると
も是等のことの爲に號呼ふことをせん苦みて余れ日を
送るものゝ爲に我哭ざりしや貧しきものゝ爲に余れこ
ろ憂ざりしや我れ吉事を望みしに凶事來り光明を待
ちしに黑暗來れり我腸沸かえりて安からず患難の日余
に追及ぬ余は日の光を蒙らずして哀みつゝ歩き公會の
うちに立ちて助けを呼ひもとむわれは山犬の兄弟とな

り駝鳥の友となれり余が皮は黒くなりて剝落ちわが骨
は熱によりて焚けわか琴は哀の音となりわか笛は哭の
聲となれり。

文學の目的

文學の目的は、人間の生活のありさまを、そのありさまのままに描き出すことである。それは、人間の生活のありさまを、そのありさまのままに描き出すことである。それは、人間の生活のありさまを、そのありさまのままに描き出すことである。

文學の目的

文學の目的は、人間の生活の真実を表現することである。それは、人間の感情を喚起し、その生活の苦悩や喜びを共有させることである。文學は、人間の心を豊かにし、その生活の意義を明らかにすることである。

完美なる文學は理性と情性とを交合的に
發達して圓滿なる思想を形造するを要す、
思想若し理性にのみ偏して發達するあら
ば人事を抛ち、獨り仙鏡に隠れて社會を
酷評する狂人となり、若し社會に事業を
採るものあらば只己れの爲利の爲にのみ
働き、己れの連帶して立つ處の團隊を害
し、遂に己れも又滅亡を餘義なくせらる

ゝに至る、要するに修養したる學術、及
 ひ理想は情と調和を失ひ、甚だ淡泊に只
 機械的の働をなし、或る時は藝術あるか
 爲に反て身を苦め、産を敗り甚たしきに
 至りては己れの思想に己れを擒にせられ
 て呻吟煩悶進退是れ谷る所に至るものな
 り、不愉快不幸の感是より大なるもの又
 あることなし、如斯に至らば文藝を知ら

ざるものこそ反て幸福なるものなり、隠
 遁者、無責任の批評家、偏理哲學者、不
 道德なる法律家等は皆此境遇を通りたる
 者なり、之に反して情性のみ發達する時
 は、俗情に迷はされ、進むべきに退き、
 退くべきに進み、始むべきに謹みて人に
 先せられ、緩くすべきに勇んで衝突し、
 泣くべきに笑ひて人に笑われ、笑ふべき

に泣きて擯斥せられ、恐るべきに怒り、喜ぶべき笑裏面に萌し始るを知らずして、反て哀み、或は目前の小利に大利を誤り、始終浮雲の如く、根なく、骨なく、經燥なる愚物として、困難と辛苦とを擔ひたる長物を製造するに過さるのみ、世の學者、及小説家巧に筆を用ひて俗情に呈媚し、只婦女子の好奇心を買ひ、収入と、

喝采とを目的として人身の節義を亂すもの、如きは文學の方針として採る可らざるは勿論、文學者と云ひて反て文學を害する者なり、如斯過失に陥るものは小説家に尤多きを見る、夫れ小説は氣骨と目的を文背に隠して讀む者をして愉快の中に善に浸潤せしめ、淫事を畫きて淫を厭はしめ、盜賊を出して盜賊の忌むべきを

隱然に自諾せしむるに至るを要とす、若し此伎能あらずして小説を艸するものは文學の假面を蒙りて人身を害する大賊なり、馬琴の夢想兵衛に於ける、小山金五郎に於ける、夢物語に於ける、ダセデソロモンの文藻に於ける如きは淫行を書して讀者の心膽を寒からしめ、怠慢者を畫きて憤然蹴起するの心を養ひ、失策者

をして尙ほ節義を守しむ、是等は文學上其責任を全ふしたる者にして如斯創作を以て世に顯われんことを望むものなり。散文、詩文の如きも、餘りに高尚に失し讀者に解し難き隱語等を用ゆる者多く、漢學者及ひ和學者のうちに見る、是等は文學の目的を誤り文藻を玩弄視して遊戯に供するものなれば其効果至つて少し、

散文の如きに至りても歴史的述記の餘りに冗長に失し理想的記述の意外に少きは文學界の餘程紛雜なるを證するに足る、吾人文學界に意を盡すもの無責任の言論をなさず、俗情を猥りに弄ひて人心を賊せず、戯に文藻を玩弄して文學を賊めず、理想に偏走せしめず、情性に流落せしめず、懇勤勉勵し、以て共に議し、共に練

り、思想を簡潔して以て其責任を完ふせんとは熱望に堪へざる處なり。

文學の定義

文學とは知情意を以て宇内を觀察し、人生をして快樂の地に進めんか爲に善美なる目的を以て美術的に發表する圓滿なる思想の記録なり。

文學とは善美なる思想によりて發表せられ

たる記録にして、文章、詩歌、演藝、小説、
經文等を云ふ。

文學とは聰明なる男女の思想、并に感情を
記録して讀者を楽しましむべきやうに排置
したるものをいふ。
散文は文致と特質とを具へたる上に精緻な
る注意をもてものしたるものにあらされば
文學にあらず。

文學は其の最も廣き意味にては總ての筆記、
若くは印刷したる著作にして觀察、思想若
くは想像の結果を保存するものを含む、確
實科學の諸著は之れを除くを通例とす、さ
はあれ時としては文學の區域を美文即ち雅
趣の作、并に情感の作にのみ限ることあり、
例へは詩歌、能辯史傳等是なり、抽象的論
文、及び純粹の學問文は之を除く。

文學は社會の發達人心の改良を目的として
 圓滿なる思想より流れ出つる種々なる文藻
 にして、其源は天真の道理より溢れ出つる
 ものなり、詩文は愉快の餘り困難の餘り道
 理を感じるの餘り知らずして文藻を草する
 ものなり。

文學とは種々なる社會に各々適合する完全
 なる思想より出つる文詞の記述にして人生

本能の發表なり。

文學とは人の思想を録したるもの、總稱也。
 而して國文學とはあるは一國民の思想を録
 したるもの、全軀を總稱するなり。然れど
 も總て嚴密に科學的と稱せらるゝ書籍を除
 く、但し科學的著述の内にもアーチテク
 チューワ、チフ、ヘブン、ゼーブ、リーステージス、チ
 フ、ゼー、ナツチュラル、ヒストリー、チフ、ゼー、ク

リエイション等は作家が主觀も顯はれたれば是等は文學書類の中に列すべきものなるべし、さてかく除却したる後に狹義の定義を立つれば下の如くなるべし。

文學とは特殊の派をなしたる人々にのみ訴へたる者にもあらず、又偏へに事物の符號としてのみ言葉を用ひたるものにもあらずして、なべての人心に旨味あるべき題を取

りて思想を傳へ、且表せんが爲めに言葉を
用ひてなべての人の智と情とに訴ふる諸著
作の集合躰をいふ。

文學とは律語と散文とを問はず、考察の作
といはんよりは寧ろ想像の作といふべきも
のなり、教化と實効とを助するよりは寧ろ
最多數の國人を樂ません事を期するもの也、
特別の智識に訴ふるよりは寧ろ全般の智識

に訴ふるものなり。

五十六

詩文

詩の要は實際に人を感動するを以て殊効とす、其人心に入り難く感動する價額なきものは詩歌の本領を欠きたるものなり、隠れたるより表はるゝはなく、其内心潔ければ聲も貌も風姿も又清かならむ、已れ先つ感動して而して俗人を感動し得へきものなり、

眞實の詩人たらんとするものは先づ第一に心の心術思想如何を観るを要とす、心平かなれば吐く處も平かに、心美なれば又表呼する處も亦美なり、喜怒哀樂の天妙に接しては言はざるを得ずして創作すること至要なれ、要言すれば自然を意の儘に發表するものなり、或は人事を詠して天地の幽妙な秘密を闡明し、天地を詠して人事の復雜

五十七

なる事理を圓滑に指道するの妙機を備ふる
を本職とす、今自然と人情と調合的に詠し
たる例を揚ぐ。

瀧の音はたえて久しくなりぬれど

なこそ流れてなをきこえけるれ

散文

散文と韻文とは區別し難し、余は假りに律
あるものを韻文とし、律なきものを散文と

す、其書方は成るべく自然を財料として高
尙なる意味を容易く摘指するを要す、假令
へば相助くるの情を言はんとするには、魚
心あれば水心ありと云へるが如し、喜びを
表するに花を以てし、哀みを表するに冬を
以てし、淋しきを表するに秋を以てし、壯
大なるに海洋を喩へ、靜逸なるに山谷を以
てす、卑に流れず、冗長に失せず、高尙な

る道理を閑雅平易のうち識らしむるを要
とす、狂文、戯曲文、比喩文、俳文、擬文、
譯文等各異なる處あれども次回の文章論に
譲る。

茲に近代の文章に意を得たる物を載す。

奥山のもみぢ吉野のさくら北野の梅も散るといへど春
たに來れば又も咲く年々に花は根にゆき鳥は故郷に歸
ると雖も余は其逃遁れかたなや實に朝露の宿かす間な
り皆人は昔ながらの山櫻散らす一木も残るではなし秋

の暮野に鳴く蟲までもかほとあだなる世を知れど身の
はかなさは何にたどへん水鳥のはし降に宿る月かけ其
面影は年に積りて其色ふりは替るども心と言葉は死生
の極め國は變るともなたにかはらじあす迄と云は迷の
敵櫻花はからす風の吹かものかはちりより賤しき身を
もちて何とて浮世を厭ふらん後れ先づ習にて昨日は不
明の塵とならん唯何事も打解けてあすより今日の喜
にこそ。

誹諧

誹諧は只十七文字の短句を以て理想を秀逸

のうちを寫すを妙とす、滑稽諧謔能く自由に理想を摘抉するものなり、我が國平民的文學の先鞭にして徳川氏の配下に起る、下等社會に文學的逸美の理想を容易く識らしめたるものは又と他にあらざるべし、其調態閑雅なる如く、卑俗なるか如く、秀逸なるか如く、奇妙なるか如く、萬國に類なき通俗的文詩、無學の者をして文學の雅致を

味はしむるを妙とす、今其二三句を擧ぐれば、

天地の壯大を詠して

荒海や佐渡に横ふ天の川

慘愴粟慄たる古戦場の亡靈を詠して

むざんやな鎧の下のきりくす

忍耐と柔順を詠して

氣にいらぬ風もあるふに柳かな

人生の目的を比喩的に詠して

身のはてを錦にのこすかいこ哉

近江八景を十七字に畫して

七景はきりにかくれて三井の鐘

世の人の餘りに輕卒なるを諫めて

白露や無分別なるをき處

沈重謙遜を教へて

みのある程頭のたるゝ稻穂かな

佛教のさとりを開きたるを畫して

田の艸を採りて衝つ込む泥の中

小説

人は自然力と超自然力とによりて立つものなり、自然力は自身の勢力によりて其能力を全ふ爲し難し、超自然力の助によりて始めて其發動を誤らざるものなり、若し超自然力を離るれば根を離れたる草木の如く一

時は其諸能力を發動すると雖も漸々生脈を失ひて遂に諸能の發動を誤り、次第に思想に汚穢を生じ、遂に枯死墮落するに至る、故に小説の要は最能力ある超自然力の情性に氣骨を繋ぎ、自然力を弄ひて憤發克己愉快を以て諸情の運轉を自在ならしむるを妙とす。

文學の發達

天に天情あり流溢して美となる、審美人
を感せしめて文となる、天輪に光り、地
嶽に隠し、動物に滴し、植物に顯はす、
萬籟の噫氣風動颺々たり、作れは則ち萬
竅怒號、山林の畏佳、音樂となり、慘慚
となり、悲哀となる、百圍の竅穴、或は
吐し、或は叫ひ、或は吸ふ、氣慨閒暗
約して天地の法則を含む、地嶽鳴動海潮

を逆し、幽遠の勢狀滿々たり、創天彌久
億門の美觀を天外に雨らし、百嶽の嚴望
氣骨鏗鏘たり、鳩に三枝の禮あり、鳥に
反哺の孝あり、下等動物能く親子順殖の
道理を興へらる、春陽百草を發揚して小
鳥花に對して歌ふ、秋夜の月は銀色空に
凝り、冬日の雪は水晶地に碎く、凡そ千
狀萬態文學の生命を懷胎せさることなし、

花木滿山に笑ひて四隣祝情に酔し、秋夜
蟲聲を聽けば片月悲哀を生む、山谿幽谷
を蹈んで閑雅の思想起り、市街の雜踏に
接れば思自ら思々たり、大澤の下能く豪
傑を生し、戰國の世迫まりて英傑を出す、
天地人に映して文理を流し、人生は其境
遇に親しく迫られて文學を生む。
人天地に後れて生れ天地に先ちて死す、

天地の道理によりて來り又天地の道理に歸す、余ありて天地あるにあらず天地ありて余あるものなり、余あるが故に天地を知りたりと云ふは余人に保持する處の理性が天地の道理性に擬せられたればなり、理想ありて理想を知るとを得べく、人間に理想あるが故に天地の道理始て流れ來るものなり、天地人生に此理想を與

へ之に命して天地を知覺するとを官せしむ、山水の明眉は能く人の美性を發達せしめて美術的文學を創記せしめ、荒野寂寞の平原に於ては自ら淡泊なる情を發動せしめて茲に人生を失望に導ひき孤獨的の感を發せしむ、人生は此處に満足を需むることを得ずして愈々克己憤勵し遂に天情を天外より呼び下し或は腦中に井堀

りて其滋情に濕されんことを望む、其忍耐弱くして此情を汲み出さざるものは中途にして不愉快の死を終り、茲に至りたるものは忍耐に忍耐を生し、希望を生し、練達を生し、理性に熟し、満足に熟し、豪強氣骨ある悲惨辛吟のうち、に人生の安愉を覓むるに至る、於茲か堅忍なる理情は天命の餘義なくせらるゝ處にほとばし

りて、遂に不撓なる文學の發達を押し出すに至る、國情と風致との異なるに従ひて又各々異りたる文學を發達するに至る夫れ如斯、是れ則ち支那に支那文學を來し、歐洲に歐洲文學あり、日本には富士山の養生したる美文學ある所以なり、社會益々墮落するに至り義人聖者の心膽を感動せしめ、身を忘れて改良の任に當

らんことを決す、天も亦聖者に命して之が救済の任に當らしむ、宗教家として命じ、學者として任じ、或は實業的慈善家として命ず、國家主義を起し、公愛論起り、安心立命の生命を流し、救世の事業爰に全地を風動するに至る、其完からざるものは次第に廢たれ、完全に近きものは暗世を輝す、其事理と神情を普く盡し

たるものは經典となり、詩歌となり、生命となり、泉流となり、鹽となり、燈火となりて世を救ふ、其國家主義なるものは其國に終り、宇宙主義なるものは全宇宙に流る、干燥せる人物此生命によりて新生命を受け、義烈憤慨なる達觀者を出すに至る、遂に其思想流れて生命ある文學となり、無數の細流文學之と合し、生

命となり、靈光となり、宇内に確乎不拔なる文學の軌軸を完成するに至る。

日本文學

社會は大學校なり、名山は良師友なり、萬有を教科書として進むは天真を愛する文學者の入校すべき學校なり。夫れ名山巍峨として蒼空を衝くの邊、雄偉氣慨なる文人を出す、池沼清漣を蹙め、草花幽香を吐く處

に、溫柔の徳義家多し、以て我國文學の靈發せし處を伺ふに足る、我國の地たるや山あり奇にして秀、水あり清く流れて快、草樹赤額隱見覆没禽鳥啾々として茅扇に相接す、富嶽の白峯、琵琶の百景、變幻妙を盡して文人を養ひ、松島の婉麗、明石の青草は數億の詩客足跡を印す、東州の新月は歌人の幽懷を引き出し、生糸あり、竹あり、

百巧に便すべく、儒佛老莊其間に隠見し、梅花幽谷より天音を招きて理情を結調す。我國の文學理想は天然の美性を人情に混和し人情を以て吸み出したる感情的美術文學なり、儒佛老莊の傳來を経てより、文學理想は碩に理想的文學となれり、儒にあるものは儒の胃中に國學を消化し、佛老にあるものは哲學的に國學を混化して之を觀察し

各其意見を異にし既に親鸞法師をして日本の天照大神は釋迦の再來せるなりとまでに極叫せしめたり、然りと雖も釋迦は彼か云ひし如く土より出て土に歸れり、孔子は天命を奉して天に歸れり、老莊百家各々行くべき處に行きたれば再來の要なき事は彼等の法敎の示す處なり、只彼の思想のみ余か國に來り、余か國天然の美なる思想と合

し、爰に新なる化合的文學者を形造し、此發達したる理想は又能く再び日本の天然を吸ひ下して、又前代の國文學と伍を共にし、經歷ある混合的文學理想を以て茲に又斬新なる文學を發達するに至れり、釋迦生れず、孔子來らず、老莊働かずと雖も、釋迦をして釋迦たらしめ、儒をして儒たらしめ、老莊をして老莊たらしめし處の天眞の道理は、

美麗婉艷なる風色となりて東西南北に羅列奔走し、此美術的天然的逸美なる理想を以て釋迦を消化し、孔子を招き、老莊を免して、日本の富士山琵琶湖的文學を起すに至れり。

今爰に老佛の本邦文學と合して發達せし文學の理想を掲ぐ。

行く河の流は絶へずしてしかも本の水にあらざよどみ

に浮ふうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとゞまる
 ことなし世の中にある人と住家とまたかくの如し王敷
 の都の中に棟を並べ豊を争へる尊き卑しき人の住居は
 代々を経て盡せぬものなれどこれを誠かと尋ねれば昔
 ありし家は希なり或は去年破れて今年は造り或は大家
 亡びて小家となる住む人も之に全じ處もかわらず人も
 多加れどいにしへ見しは二三十人中に僅に一人二人
 なり朝に死し夕に生るゝ習ひ唯水の泡にそ似たりける
 知らず生れ死ぬる人何方より來りて何方へか去る又知
 らずかりの宿り誰か爲に心を惱し何によりてか目を悦

ばしむるこの主人と住家と無常を争ひ去るさまいは
 朝顔の露に異ならず或は露をちて花残り残ると雖も朝
 日に枯れ又或は花は萎みて露なほ消えず消えずと雖も
 夕をまつとなし……それ人の友たる者は富めるを貴
 み戀なるを先とす必ずしも情あると直なるとを愛せず
 只花と月を友とせんには之かず……衣食のたくひ又
 全じ藤の衣麻のふすま得るに従ひて肌をかくし野邊の
 茅花峰の木の實、僅に命をつぐばかりなり人にましわ
 らされは姿を恥つる悔もなし糧乏しければをろそかな
 れども猶あじをあまくすすべて斯様のこと楽しく富め

る人に對して言ふにはあらずたゞ余身一つに取りて昔と今とをたくらふる計りなり大かた世を遁れ身をすてしより恨もなく恐もなし命は天運にまかせてをしましといはず身をば浮雲になそらへてたのまぢまだしとせざ一期のたのしみはうたゝぬの枕の上に止まり生涯の望はをりくゝの美景に残れりそれ三界は只心一なり心若し安からずは牛馬七珍もよしなく宮殿樓閣も望なし今さびしき住居一間の庵みつから之を愛す自ら都に出てゝは乞食となれることを恥ずと雖もかえりて爰に居るときは他の俗塵に著することをあわれぶもし人此の

云へることを疑はゞ魚鳥のありさまを見よ魚は水にあらず魚にあらずは其心を知らず鳥は林を願ふ鳥にあらずは其心をしらず閑居の氣味も又かくの如し住ますして誰かさどらん云々

月かげは入る山の端もつらかりき

たえぬ光はみるよしもかな

近代に至り活動せる新文學強潮流をなして
 歐洲より流れ來り在來の舊文學を呑み盡し
 て己れの滋食となさんとせり此文學の源は

義憤公靈なる宇宙的公愛の血滴よりほとば
しり困難と辛酸のうちに人生の最大快境を
築かんと勤め其生命甚だ強健今此理想を通
して押し出したる文學の詩を掲ぐ

「なやみにのぞみて	おそれもなく	あだはせめくとも	みきにたよらん
こころみにあふきも	つぶやきなく	かなしきなきにも	きみにたよらん
やみぢをあゆむも	うたがひなく	あらしのなきにも	きみにたよらん
かみのまさみちを	ふみまよわず	よなるるをまて	きみにたよらん
きみのみちかちを	うけてしのび	つきせぬめぐみの	みくにのぞまん
「いさもいそしめ	みちのともよ	なけるしらつゆ	きねぬまに
まつまさへなく	よはきたれば	あさひてるまに	いそまめよ

いさもいそしめ	みちのともよ	のほるひかげの	かやくま
すぎゆくさきは	やよりもはやく	よのまきなれば	いそしめよ
いさもいそしめ	みちのともよ	にしにしづめる	ゆうひかげの
かすかにのこる	ひかりのまに	わざなしをねて	いそしめよ
「つみのゆるしを	ねしきもは	かくこそやすく	ひをおくれ
うきのなみかせ	たちくるも	こころにあめの	やすきあり
さきはにきねぬ	たのしみの	こころにみてる	みたみちは
のほるあさひさ	はれやかに	ゆふべのみそらさ	しづかなる
あまつみくにの	さきわぎの	すくしきかげを	まつきもは
かたりねがたき	たのしみは	そのをもてにぞ	みねにける
こがねしろかね	なべてよの	たからはものゝ	かすさせぬ
きみがみたみは	あまつよの	たのしみをこそ	ひにまで
「あめなるわがやを	あふきみれば	なみだもなそれも	さりてすまん
はげしきこのよの	あだのうち	なちくるひやはは	ふせきてたまん
かなしみわがみに	あめさふれど	たあふきみつゝ	のほるわがや

つゆのうさもなき	あまつくに	つかれしわがたまは	ながくやすまん
「かなしみのあらし	うきのなみたつも	のがるまごころは	いのりのいへなり
われらにめくみを	そぐまのまへは	いさよるこぼしき	いのりのいへなり
いのるべきさころ	このよにあらずば	あだをさるちから	いづこにかもさめん
つみのをしいなき	いのりのいへにて	こころにみつるは	あめなよるこび
「はなにおける	つゆのたまは	あさひにてり	かやくま
さくおきいで	いさたのしく	かみのみなを	たじゆべし
あめつちの	ものみなさ	たくねまつれ	ながかみを
なつのあさけ	すとしきまに	もろちどりの	こねをきけ
よのものみな	わがこころも	かやくけるま	たじゆべし
あめつちの	ものみなさ	たくねまつれ	ながかみを
「ふせぎまもれ	こころみなを	しのおこさに	つよめらる
おのれにかち	たまかひて	きみによらば	救はるべし
あしきさもな	たねすさり	きみのみなさ	なげがして
まごころをもて	いさはげみ	きみによらば	救はるべし

ひのもごなる	このみくにを	か	ねり	み	なみかぜなく
いさやすらに	まもりたまへ	わ	が	か	み
このみくにを	よくにたかく	た	く	せ	て
よものうみに	うつしたまへ	わ	が	か	み
あめつちをも	しろしめせる	わ	が	か	み
なをみくにを	まもりたまへ	よ	こ	ま	で

是をクリスト教文學となす保守舊文學派のものは眉を擧めてしきりに國に害ありとなす吾人の信する處によれば反て日本の害を除くものなりとなす勿論歐洲の風俗政治を咀嚼せすして猥りに施すときは或は害の生

するなきにあらず然れども釋迦を招き歐陽
 明を容したる日本の風景は日本のクリスト
 教新文學を生まざるの理あらんや今國民子
 の示したる處を載して余の不文に換ふ

一週日の間に三府を瞥見せる外人動もすれば則ち我國
 を評して曰く日本は如何なる健脚を有すれば三十年の
 歲月を以て歐米數百年の開化を追はんとするかと彼等
 は日本を以て開國以來僅かに三十年を経過せしものと
 なす彼等は日本の歴史既に國民の資額を造り居を知ら

ざるなり我國は文明の大勢力を同化せしめて、我用を爲
 さしむるを知らざるなり……如何んぞ歐西の文明を
 吸取して不消化病に倒るゝとあらんや……吾人は根
 本的變革の性質に富みたる宗教の上に於てすら余が國
 民の同化力を示し得たり佛教の余か國に來る欽明の朝
 にあり蘇我守屋等宗教の戦争を爲したるは……是よ
 り以往列世の天皇宣敎使を發して佛教を天下に講説せ
 しめ刑賞百端宗教の手段一として施されざるはなかり
 き然れども遂に公卿宮庭の宗教にして國民の宗教たる
 能はず一時は人をして佛教の宣布に斷念せしめし程な

り是れ何の故ぞ是れ其國民的觀察に投する能はさるか
 故なり詳く言へば國民に同化せざりしが故なり余は已
 に神を有す我神の外何の要ありて蕃神を拜せざるべか
 らざるか是れ推理力ありとなきとを問はず國民の心中
 に於ける必然の疑なり故に佛教が本地垂跡の説により
 て日本の神は佛の權化せるものとなし此疑問を解する
 までは渡來一百五十年間至大の勢力を揮ふ能はざりき
 彼の蘇我氏か守屋に勝つや必ず佛教傳ふべしと思ひし
 ならむ然れども隱頓進止の間に一百五十年を費して本
 地垂跡の説によりて日本の神と同化したる後に於て始

めて國民の間に入るを得たるを見ては以て余か國民同
 化力の至大至剛なるを證すべきなり此時に當りて余か
 宗教は果して如何なるものなりしか人の死魂を祭り千
 萬人野に叫ぶの宗教のみ高尙なる佛教を同化せしむる
 こと如斯米國に一怪樹あり動物の之に觸るゝあるや其
 枝葉合して動物を卷縮し其血肉を吸ひ枯骨となして後
 止むと其犬猫たると獅子たるとを問はざるなり同化力
 を有するの國民は殆んど此怪樹の如し諸民諸音諸族を
 問はず之を一切同化せしめて己れの腹を肥さずんば止
 さるなり云々 (國民の友二百五號)

支那文學

支那の文學は二派に區れて互に反目す一派は佛老莊を始とし若くは之と主義を同ふする諸家の説にして、主觀的に道理を觀察し、已と天地とを同一物となし、人生の喜樂辛酸は天地に春夏秋冬あるか如く、隨輪相循少も區別なきものとなす。

性相空寂。無大無少。無性無滅。非往非

動。不進不退。猶如虛空。無有二法。而諸衆生。虛妄橫計。是此是彼。是得是失。起不善愈造衆惡業。轉廻六趣云云

故に困難も苦みとするの理なく、喜樂も喜とするの理なしとなす、如此く達觀して確信と満足とを與ふるに至りたるを佛者覺識と唱へて其奧義を得たるものとなす。華嚴に教ゆる處則ち是なり、其法性の動機變幻

妙致なる、到底深く味ひ難く、永劫無量なるを無量教に於て之を指揮す、他の二派は客觀的に之を導き主觀的に之を察す、天地を道理の本源となし萬物は之によりて成り、人間を以て萬物の靈となし、法命の示す處に従ふを人間の道となす。禹陶文武周公孔子孟子等の説きし處にして、之を王道又は天道の道となす、此文學の示す處は萬事軌

模を天則に則り、天の命するを物の性と云ひ、性に從ふを以て之を道と云ひ、此道を修むるを以て人間の教となす、此道は萬物と人間と尤密接にして須臾も離るべからざるを要となす、此説は前派よりは平易にして致味又濃厚なれば俗人に學ひ易くして又人を化するの力強し、前者は萬事を理性に訴へて萬事を無に歸し、後者は情性を通し

て理性を發せしむる實理的文學なり。佛者は其説の人を化するに欠けたるを識り後に至り方便説を設けて性情を引き出し、假定的安心を與ふるに至れり、是によりて或は靈性を危逸なる誤りに發動せしめ比喻を以て實在物なるか如く認識せしむるに至れり、此の文學に妙機ある處は無量なる哲理を至つて誇大なる比喻を以て示し人生の美性を

快抉して理性に繋ぎ想像力を發育して華美なる美術的文學を方便のうちに發達するに至れり。今普觀教に表はれたる一例を掲ぐ、讀者の便を思り日本文に譯す、

普觀菩薩は身邊無量、音聲無邊、色像又無邊なり、此の國に來らんと欲して自在に神通に入り、身を促めて小どならしめ、知慧力を以て化して白象に乗れり、其象六牙あり、七支地を陸へて七蓮花を生せり、其色鮮白白中に上昇するものなり、頗梨雪山も化を爲すを得

ず、身の長け四百五十有旬、高さ四百有旬なり。六牙の端に於て六浴池あり、各浴地の中に十四の蓮花を生じ、池と正等なり、其華開敷せること天樹の王の如し、各花の上輪に一王女あり、顔色紅の如くして天女に過きて暉る、手の内自然に五篋篋を化せり、一一の篋篋に五百の樂器ありて眷屬たり、五百の鳥鳧鴈鴛鴦皆衆寶の色にして華葉の間に生せり、象の鼻に華あり、其色赤真朱の如く金色にして含んで未だ敷かず、…至心諦觀して大乘を思惟すると休廢せされは華則ち敷き、金色に金光輝く、其蓮花臺は是れ甄叔迦寶妙梵摩尼に

して以て華臺となし金剛寶を華鬚となせり、化佛蓮華臺に坐し衆多の菩薩蓮華鬚に坐せり化佛の眉間より又金光を出して象の鼻中に入る、紅蓮華鼻中より出て、象の眼中に入り、眼中より出て、耳中に入る、象の耳より出て、象の頂上を照して化して金臺となる、象の頭上にありて三化人あり、一は金輪を採り、一は摩尼珠を持ち、一は金剛杵を杷る、杵を擧げて象を擬するに象則ち能く歩行す、脚地を履まざ虚を躡りて遊ぶ、地を離ること七尺、地に印文あり、印文中に於て千輻の穀輞皆悉く足を具せり、一一の輞間に一大蓮花を

生ず、此蓮華の上に一の化象を生ぜり、亦七支ありて大象に従從せり、象の鼻は蓮華の色なる上に化佛有して眉間の光を放つ、其光金色にして前の如く、象の鼻中に入り出て、象の眼中に入り、象眼より還りて象耳に入り、象耳より出て、頂上に至る、漸漸上りて象背に至る、化して金鞍となりて七寶校具せり、鞍の四面に於て七寶の柱あり、衆寶校飾して以て寶臺をなせり、臺中に七寶の蓮華髻ありて百寶を以て共に成れり、其蓮花臺は是れ大摩尼なり、一りの菩薩ありて結跏趺坐す、名けて普賢と曰ふ、身は白玉の色にして五十種の

光あり、光りに五十種の色あり以て頂光となし、身の諸の毛孔より金色を流出す、其金光の端に無量の化佛有まして諸化の菩薩を以て眷屬となせり、云々……

又隨輪相循説の一斑を示せば無量經に於て

大なるかな大悟大聖主、垢なく、染なく、所著なき天人……、意滅し、識亡して心亦寂なり、其身は有にあらす無にあらす、因にあらす縁にあらす、自他にあらす方にあらす、圓にあらす長短にあらす、出にあらす没にあらす、生滅にあらす非造非起爲作にあらす、非坐非臥行住にあらす、動にあらす轉にあらす、閑靜

にあらざ、進にあらざ退にあらざ、安危にあらざ、是にあらざ非にあらざ、得失にあらざ、非彼非此、去來にあらざ、非青非黃、赤白にあらざ……三昧六通道品より發し、衆生善業因縁より起る……實には相非相色なし、無相の相にして有相の身なり、衆生身相の相も亦然なり、又曰く諸法四相の義は苦の義、空の義無常無我無大無小、無生無滅、一相に相なく、法性法相、本來空寂、來らず去らず、出でず没せず云々。

老莊の説は心無なれば衆妙の道理宿り、之

を有相とするときは道理に離るゝと説けり、故に大徳は徳ならず、最善は善ならずと云ひ、之を例解するに家室の人間を住せしむるは坐敷の空なる處にして柱及ひ戸障子は人の躰を容れずと云へり、莊子の説は有性と無相とは互に同じき故に衆理虚を理の相となせり、(齊物篇)如斯き文學に甘んずるものは情を淡味ならしめて社會の雜務に厭滯

し、己れを全ふするのみにして其他を顧みざるに至る、意の向ふ處遂に佛の教理と合し、厭世的文學を出するに至る、儒教の流れは明德を明にするを以て事務となし、道を遠に覓めずして之を経験と希望とのうちに求め、天によりて人生の雜事を處便することを務む、佛教の方便の調によりて情の餘命を全ふしたるもの之と或は合し社會に

活動的文學の一流を出すに至れり。

歐洲文學

歐洲の文學は其源を二泉源より發す、一派はギリシヤ、ラテン、の古典より起し、一はユダヤ文學の系統に發達す、英佛の美術的文學はローマ、ギリシヤ、ラテン、の流れに發達せる處多し、其熱力はユダヤ文學の流動に劣る、米國に至りては全くユダヤ

文學の情熱にのみ心酔し之を名けて正理派となし其他のものを邪説派となす、獨乙國は此兩派を兼ね至りて自由にして加ふるに支那文學を混合せり、歐洲文界の叢淵にして文美婉艷四表に流動す、カントの如きヘーゲルの如きはラテンの流れを表はし、シルレル、ゲーターの如きはギリシヤ、ユダヤ、の系統を多く流す、レツシング、シエ

ペルハウールの如きは暗約して東洋の哲學に類す、近代に至りシユライヘルマツヘル、プフライデレル等の學者起り眼光を宇内に放ち達觀せる新説を起し其論鋒隱見覆沒詳知し難しと雖も宇宙的歸一説にかたむき歐洲の固息文學を切倒せんとせり、文界の潮流如斯なるか故に自ら爰に保守派自由派を生じ、互に櫟樞して以て又文界に化合的新

生命を生じ二十世紀に命約せる文學の芳芽
を萌すに至れり。

歐洲の文學思想の大班を示せば

眠る心はみくになり、見ゆる形はおほるなり。
あすはあすなれ今日ばかり、あわれはかなきものぞかし、
なぞとあはれに云はあし。我が生命こそまことなれ、
肉はちりえと別るれど。是はからだのうへのこと、
人の願はのみ喰か。人の願は是ならず、
只怠らず働きて。喜びむぬにたくわえて、

たのしく暮すことにあり。此身をよせて先がけに、
なりて益々すゝむべし、用なきものとなる勿れ、
如何に未來はたのしくも、此の世のたのしみ通ふらでは、
とてもゆかまじそのみくに、神を忘れずわれを知り、
はたらくべきは今日ばかり、たのしむべきこと世に多し、
喜ぶべきこと又多し、勉め勵めば得るならむ、
赤心あらば見るならむ、海より荒き世の中に、
波間に漂ふ捨小舟、波に浮ばし渡るらむ、
波に向はし沈むらめ、さすれば鰯を用意して、
心盡して機を知りて、神にたよりて祈りして、

如何なる運もことゝせず、高きに至れいそしめよ、
たのしみあるぞいそしめよ、

ユダヤ文學とギリシヤ文學と調和せられて
發達せし文學理想の流れし淵源の一斑を示
せば、

大初に道あり道は神と偕にあり道は即ち神なりこの道
は大初に神と偕に在りき萬物これに由て造らる造られ
たる者に一として之に由らで造られしはなし之に生あ
り此生は人の光なり光は暗に照り暗は之を曉らざりき

ユダヤ文學思想の淵源の一斑を示せば

心に謀るところは人にあり舌の答へはエホバより出つ
人の途はちのれの目にことごとく潔しと見ゆ惟エホバ
靈魂をはかりたまふなんぢの作爲をエホバに託せよさ
らば汝の謀るところ必ず成るべしエホバはすべての物
をちのくその用のために造り悪人をも悪き日の爲に
造りたまへりすべて心たかふる者はエホバに悪まれ手
に手をあはすとも罪をまぬかれ憐憫と眞實とによ
りて愆は贖はるエホバを畏ることによりて人惡を離
るエホバもし人の途を喜ばじその人の敵をも之と和ら

がしむべし義によりて得たるところの僅少なる物は不義によりて得たる多くの資財にまさる人は心にその道の途を考へはかるされどその步履を導くものはエホバなり智慧を得るは金をうるよりも更に善らずや聰明を得るは銀を得るよりも望まし悪を離るゝは直き人の道なりその道の道を守るは靈魂を守るなり驕傲は滅亡にさきだち誇る心は傾跌にさきたつ卑き者に交りて謙たるは驕ふる者と偕にありて獲物を分づにまさるエホバに倚頼むものは福なり心に智慧あれば哲者と稱へらるくちびる甘ければ人の智識をます明哲はこれを持つも

のに生命の泉となる愚なる者をいましむる者はそのれの愚是なり智慧ある者の心はそのれの口ををしへ又そのれの口唇に知識をますこゝろよき言は蜂蜜の如くにして靈魂に甘く骨に良薬となる人の自ら見て正しとする途にして終はつひに死に至る途となるものあり勞する者は飲食のために骨をるはその口己れに迫ればなり邪曲なる人は悪を掘るその口唇には烈しき火の如きものあり偽る者はあらしひを起しつげくちする者は朋友と離れしむ強暴人はその隣をいさなひ之を善からざる途にみちびくその目を閉ぢて悪を謀りその口唇を盛め

て悪事を成遂く白髪は榮の冠弁なり正義しき道にて之
を見ん怒を遅くする者は勇士に愈りおのれの心を治む
る者は城を攻取る者に愈る人は籤をひくされと事を定
むるは全くエホバにあり

ラテン文學理想の歐洲へ流れ來りし淵源の
一斑を譯出すれば

宇宙のことは彼是の、別を論せず諸共に、理法のなき
はあらぬかし、天に光れる星月や、地に生ひ出つる動
植や、是等を樂む人間も、皆諸共に一申の、道を通し
て出つるなり、心盡してなかわれば、人も草木も獸類

も、空かけりゆく鳥類も、こゝろを持たぬものはなし、
其又心に強弱の、別はあれども皆共に、全し理法の生
き死にぞ、先はあるやらあらぬやら、元きし道に歸る
やら、其又道は如何様の、ものであるやら知らぬとも、
兎に角物は理に出て、又此理にぞ歸るらめ……

文學の調停

文學ありて社會あるにあらず、社會ありて文學あるものなり、社會ありて人間あるにあらず、人間ありて社會あるものなり、社會は人によりて成り、人は文學によりて其責任を全ふす。人文學を離れて思想なり難く、文學も亦人間を離れて花蕾綻びさるものなり、人の文學に於けるは魚の鱗に於けるが如し、人文學の叢淵

に泳ぎ、文學は人の思想を通して浮び出つるものなり。魚能く鰭を持つと雖も水を離れては鰭を用ひ難し、水と魚に於けるは文學と天地に於けるが如し、天地あり、社會あり、人ありて始て是れを草す、天地人の三遇は實に是眞實なる文學の父母、眞實の文學によりて眞實の人起り、眞實の人を通して眞實の文學生る、人天

地より離れ難く、文學人より離れて社會の外に立つの用なし、合循連帶其關係の密なると恰も又輪の如し。知性ありて本性あるにあらず、本性の命によりて知識は發達するものなり、本性を経ざるの知識は不完全なる感覺にして社會に油するの良知にあらず、情性ありて本性あるにあらず、本性ありて情性あ

るものなり、本性の命を経さるの情動は
 亂雜なる發動をなして知識を油するの良
 情にあらず、良知なくして良情起る術な
 く、良情なくして良知機に働くの敏なし、
 良情の起る術なく良知機に働くの敏なく
 して完全なる思想起るの所以なし、完全
 なる思想起らずして天地を解したるもの
 なく、人を知りたるものなく、社會を識

りたるものなし、天地を解せず、人を知
 らず、社會を識らざるものは、完全なる
 文學を起すとなし、管に起すとなきのみ
 ならず、文學の何たるを知るとをも了識
 するとを得ざるものなり。
 文學人と調和を失ひ獨り一隅に隠れて光
 明なく、人も亦文學を味ふの生命なく、
 獨り呻吟して中夜に泣く、文仙天地に羅

列して人を招くと雖も人之に應じて門戸を開かざれば強て來らず、人之に應ずると雖も其應ずべき資格なきものは應ずるのみにして益なし、童に益なきのみならず反て其身を害するものなり、文學者は偏理を玩弄び純正の道理を以て指導せし、若し導くとすれば高尚に失して只一隅の人に適するのみ、社會は罪惡に沈淪して

目前の活路に苦み、道を忘れて愈々道を譏るに至る、之に應ずるの資格なきは資格なきものゝ怠りなり、道理を忘れて道理を譏るは譏るものゝ罪なり、猥りに偏理に甘酔し或は高尚に失するは偏理に失し高尚に失したるものゝ不注意なり、不注意の起るは信實なきを以てなり、高尚に失するは社會を愛せざるなり、偏理に

意張り立つるは普通の文識を畜へざれば
なり、譏りて罪を招くは道を愛せざるの
天刑なり、怠りて資格なきものとなるは
自から招く馬鹿なり、馬鹿となり、天刑
を招き、普通の文識を備へず、信實なく、
社會を愛せざる皆人生の本性にあらざる
なり、人生の本性を欠きたるものは天則
に則らざるものなり、天則に則らずして

社會を知り、己を知り、境遇を知り、接
合を知り、情を知り、知性を知り、人生
に適合せる文學を草することを得んや。
彼等は天則を愛せざるにあらず、天地を
嗜好するの本性を失へばなり、彼等は本
性の完からんことを欲せざるにあらず、
然れども如何にして完からんか術數殆ん
ど盡果たり、彼等は謹慎家となり、普通

の博識を得し、卓觀せる觀察を具備する
 とを好まざるにあらず、然れども如何に
 して博識に觀察し、如何にして不正義よ
 り離るべきか思術殆んど枯れ盡くせり、
 若し爰に不正義をして正義家となし、偏
 理家をして達觀となし、本性を道理に接
 合せしめて博識となし、達觀となし、天
 則に到らしむる術でありとせば、是れ萬

障を除却して考究せざるべからざる急務
 なり。

天地の顯象は知識的の性を多く發揚し、
 義人君子の血涙は情者をして勇奮せしめ
 て道德的情性を感發せしむ、天地道德性
 を發揚すへき神氣なきにあらず、只墮落
 せる人生は天地の顯象に親しく接吻する
 を得ざればなり、山水の明眉、知情を流

さざるにあらず、然れども人間の知情より遙に劣るものなり、音に劣るのみならず、道德的生命は全くなきものなり、獨り人間に至りては天地の法則を充し、靈を有し、知を有し、愛を有し、正義公道の靈命を有す。法則を充したるものは不法の改良せられん爲に身を盡し、雜事を明察し神氣慄然人を畏服し正義公道を有

するものなり、愛を有するものは人の爲に寛忍をなし、人のために益をなし、妒まず、誇らず、驕らず、非禮を行はず、利私のみに進まず、輕々しく怒らず、不義を喜ばず、凡そ事包容み、凡そ事信じ、凡そ事望み、凡そ事忍び、憐恤者の爲に涙を流し、不正の爲に血を灑ぎ、不義者を救ふ爲に献身し、社會の不調和を悲み、

人の道より離れしを歎き、人生の本性を
 甦發し、博識を與へ、觀察を與へ、勇氣
 を與へ、忍耐を與へ、雅量を與へ、歡を
 與へ、正義公道天眞の生命を與へて、達
 觀家となし、博識家となし、本性を有す
 る神人となし、圓滿無量の樂園に救ひ出
 さんとして勇奮して不義の爲に九嶽の苦
 極を永續せらるゝも其氣節を掘かざるも

のなり、其義節は奮漲して四境に猛溢し、
 其仁愛は萬難を溶解きて快情の東天に近
 つかしむ、靈泉となりて干燥界を濕し、
 靈光となりて暗界を輝し、新生命となり
 て陰雲たる死塊を活動せしむ、茲に於て
 か情者は奮勵し、不義者は義あるを知り、
 姦佞其處に安んぜずして義界に旅立を始
 むるに至る、久しく俗塵に葬られし知情

は靈泉に濕はされ、靈光に照され思々懺悔茲に始めて人生の大問題を識得し、社會を覺り、天地を知り、己れの如何なるものなるかを氷解するに至る、人生を識りたる眼光を以て人生を察せば人生の過失を生ずるとなし、己れの如何なるを知りて社會に立たば其接合を失策に過つとなし、天地の如何なるものなるを達得し

たるものは天地の法則を嗜まざらんと欲するも得べからざるなり、天地を達觀して天地を達觀したる人の文藻を讀み、人生を覺りて人生の道理を感ぜざるなく、感ずる處、思ふ處、進む處、退く處、爲す處、止む處、百情三知、其軌に則らざるなし、百情三知公義公道に依りて進まば爲すものとして成らざるなく、思ふ處

として正ならざるなく、感ずる處として愉快ならざるなし、則ち是れ天地を知らしめ、本性を識らしめ、博識となし、卓観家となし、天則に則らしむる生命なり、吾人如斯き義聖者の起らんとを望む者なり、若し起らざるならば如斯大聖の靈命を干藻せる社會に繋がんとを渴望して置かざるなり是れ文學と人生と調和せしむ

るの秘機吾人は他に求むるを得べからざるなり、之に仍りて文學家たらば眞正の文學者たらん、之に仍りて文學を味はし、其趣味腦裡に溢れざるなし、求道者も、教役者も、義に勇み、道に進み、己れを知り、人生を識り、社會を覺し、天地を観察し、其適合を誤らざれば何んぞ文學と人間と調和せざるの理あらんや。

美

完成せるものは完美なる外觀を與ふ、不完
 全なるものは完全なるものを需む、天地の
 法則は完全なるものたり、山海動植は法則
 を完滿して出づるものなり、故に天地の外
 觀は審美を示す、蒼天の星辰、深山の泉、
 涎々たる群鳥、牝獐の子を愛するのさま、
 婉艷なる嬰兒の笑顔、俗人と雖も之に對し

て喜悅の情を促かさざるものなし、既に喜
 悅の情を起す是れ美に應化したるの時なり、
 喜の爲には困難も意とせず、朝起をなし、
 忍耐を爲し、希望を生し、練達を生し、彼
 岸の審美と同化せざれば其樂より離れ難き
 ものなり、浦島太郎の如きは山水の美を求
 めたるものなり、西行の如きは天地の美に
 招かれて銀猫を忘れたるものなり、怒聲眉

を擧むる不調和の家庭も愛子一笑の美情に
 困苦を意とせざるものなり、常盤御前の如
 きは此美に招かれて身を全ふしたるものな
 り、山水に招かれたるものは山水に終り、
 天地に招かれたるものは天地に活歩す、情
 の美に接したるものは情中に理性を全ふす
 るものなり、此喜びを詩に詠じ、此美情を
 文に章せば、天地に接り、困難に進退を辨

じ難きもの又能く其機を辨す、其機を識り
 其情を探りて又完全なる審美に接すれば流
 れて泉となり、河となり、圓滿喜樂の彼岸
 に達する難きにあらざるなり。

音 樂

眼を通して天地の理法を認識する是を觀察
 と云ひ、其快味なる感情を美と云ひ、耳門
 を通り音聲となりて認識する是れを音樂と

云ふ、風雷海波の怒號、啾々たる小鳥の音、
 聲、悲哀なる蟲聲、六律六呂の和聲、皆天
 音の生命を送るものなり、人を笑はしめ、
 或は泣かしめ、或は怒らしむ、起坐進退人
 生を自由に支配する自在力を有するものな
 り、敦盛をして青羽の笛を死出の遺産に残
 さしめ、信玄をして生命を之に奉ずるに至
 れり、其他蟲聲に風雷に人生のさとりを促

かさるゝもの幾人なるかを知らざるなり、
 之を利用して戦争に用ひ、祝會に用ひ、教
 會に用ひ、危嶮なる情の發動を理性に調和
 して人生の識りに媒介せざるものなし、嗚
 呼音楽の靈能夫れ偉ならずや。

義人の血涙

出師表を讀んで涙を流さゝるもの其人にあ
 らず、佐倉宗五郎の血涙に望んで節義の情

を起さゝるもの人性にあらず、人は學問を
修めざるも普通の道理は經驗によりて保つ
ものなり、理性には或は乏しき處あるも節
義の血涙に灑かれては濃厚なる情の發動は
暗節して理性を完全に敏動せしむるものな
り、世には理想を持つもの至て少し、世に
は學理に通曉したる者又少し、文學の目的
は少數の者に道理を識らしむるものにあら

ず、全社會を平等に導かん職務なり、全人
類を道に進めんが爲なり、全人類を教ゆる
には全人類の感し得べき方法を覓むるを要
す、近時二三の文學者は義人の血涙を以て
理想界を調和せんとせらるゝを謝す、地方
の爲に涙を流したる義人は地方の人に涙を
流さしめ、一國の爲に涙を流したる義人は
一國民に涙を流さしめ、全宇宙を激動し得

べき憤慨なる血涙を絞りたるものは全宇宙の理想を支配するものなり、吾人は余か枯死せんとする理想に最氣焔ある血涙を以て生命を與へられんとは希望に堪へざるなり、

宗 教

前半世は知識を求め後半世は靈魂の安を覓む、是れ性情と歴史の示す通理なり、前半世は破壊的の時代にして後半世は建設の時

代なり、此の故に知識の最終は靈界に渡り靈知は流れて事理を建設するものなり、最終の知識を講じ建設的の安逸を導く、宗教の勢力ある所以爰に察せらるべきなり、夫れ宗教は事業に失望せるものを勵まし、困難なるものを助け、諸能力の主府なる靈想の苦悶せしものに快樂を與ふるものなり、(余の爰に宗教と唱ふるは人情と理性とを兼

備せるものにして如何なる社會にも適し得べき天啓の調和力を有するものにより道理と人間と密接せられんことを渴望して調和力の助勢によりて其調和せらるゝ方法に熱望する有志の集合体を云ふ。祈によりて志節を養ひ、音楽によりて高雅の美性を養成し、演舌に仍りて人の經驗を示され、失望なく、困苦なく、煩悶なく、愉快のうち能力を

發達するものなり、
文學働きて宗教を起すにあらず宗教反て文學を起すものなり、宗教盛んなれば文學美術盛んに起り、宗教衰頽すれば文學美術隨て廢たる、エジプト、ギリシヤ、ローマの文學美術、奈良、足利、徳川の文學、支那に於ける、印度に於ける、歐洲の文明に於ける、皆宗教の生命に由りて發達せざるも

のあらざるなり、真正の美術家、真正の文
學者、真正の哲學者に宗教の感念なくして
發達せしもの一人もあらず、ソクラテース
の如く、ゲーテの如く、シルレルの如き、
馬琴の如き、紫式部の如き、皆此思想の門
戸を経ざるもの一人もあらざるなり、田夫
無知一介の賤民も之によりて文學者となり
預言者となり英傑となりたるもの幾人なる

かを知らざるなり、馬太の如きヨハネの如
きアンデレの如き王郎の如き皆此思想に浴
せしものなり、此の宗教は真正の學者を起
し、貴賤賢愚少も偏するなくして快活のう
ちに高雅逸美の思想を天外より呼下して人
生に階しする調和の生命なり。

7/35

近刻 ^{5/27} 家の憲法

國に憲法なきときは其國亂れ一家に規律なきときは其家破
 る夫れ人は貴賤貧富士農工商各其境遇を異にするものなり
 異なるものは異なる處の分によりて進退を決せざるべからず
 此機を誤るときは右轉左跌事實と衝突して赤心も困苦も忍
 耐も其効をなさざるなり(農家の憲法)(工家の憲法)(商家の憲法)
 (貴賤貧富の各憲法)(其他五十三の僧俗社會に對する各憲法)(東
 西大家の家庭憲法)

明治廿七年二月廿一日印刷
 明治廿七年二月廿四日發行

(定價貳拾五錢)

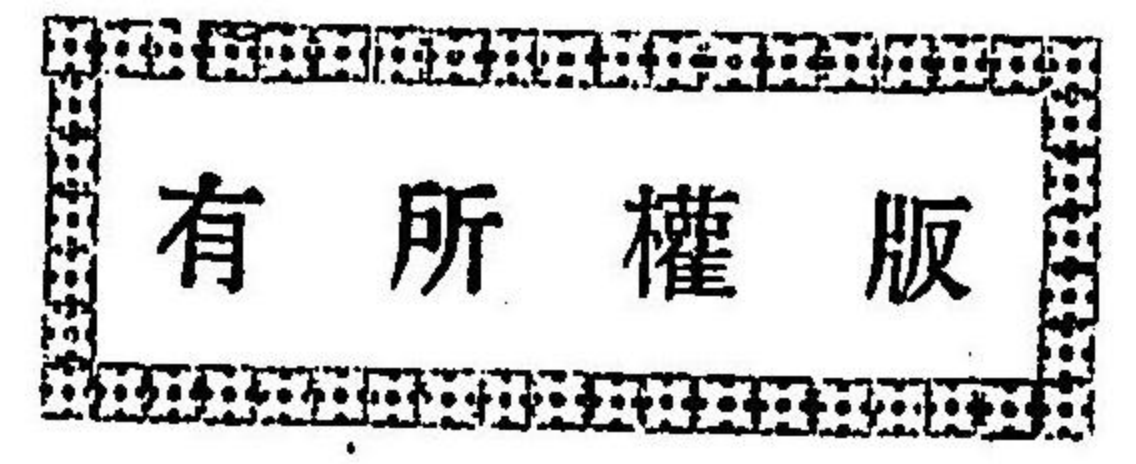
著者兼發行者 長野縣平民 大月 隆

印刷者 佐久間 衡治 東京市神田區小川町五十三番地

印刷所 株式會社 秀英 東京市京橋區西紺屋町廿六番地

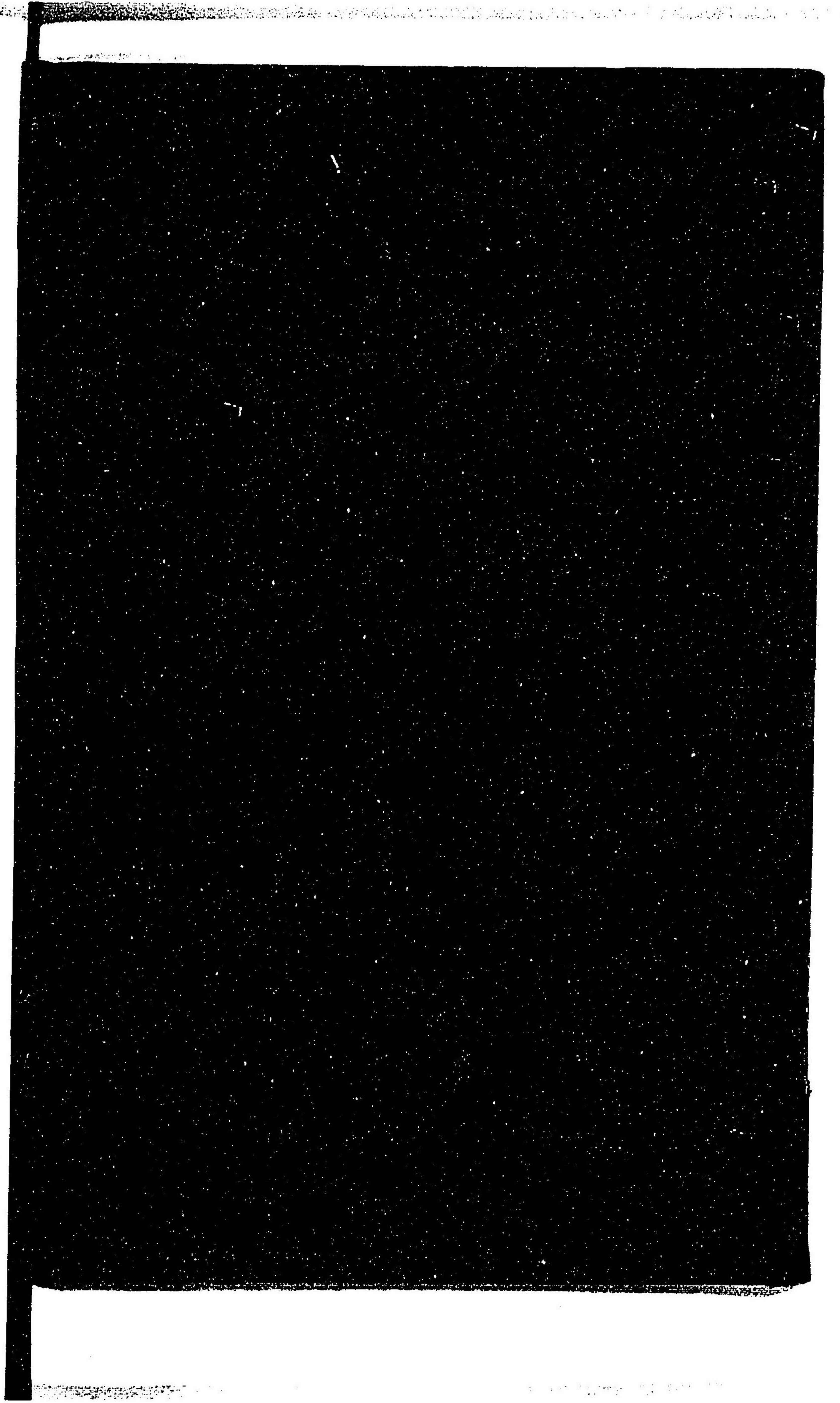
發行所 書肆 岩藤 太郎 東京市神田區錦町三丁目貳番地

賣捌所 東京各書肆



8.5. 28

72
8



084821-000-1

72-8

文学の調和

大月 隆 / 著

M27

DBA-0166



